

Newsletter

March 2025

<http://www.aack.info>

目次

追悼 岩坪五郎さん (2024年5月23日逝去)	岩坪五郎先生	中山茂樹11
五郎と暮らした日々	岩坪五郎さんの思い出	芳賀孝郎12
岩坪五郎さん	「岩坪五郎」先輩のご逝去に心を込めて哀悼の意を捧げます	藤本栄之助13
追悼 岩坪五郎さん	「ゴローさん早く逝ってしまったなあ!!!」	松浦祥次郎14
岩坪五郎さん	岩坪五郎さんを悼む	山本良三16
ゴローさんのこと (大学紛争のころ)	ゴローさん追悼	横山宏太郎18
甲斐邦男5	事務局だより20
悪い先輩ゴローさん	会員動向20
斎藤清明6	編集後記20
岩坪五郎さん追悼		
酒井敏明7		
追懐の岩坪五郎さん		
左右田健次7		
名参謀への感謝		
谷 泰8		

追悼 岩坪五郎さん (2024年5月23日逝去)

五郎と暮らした日々

岩坪吟子

1962年2月1日、私たちは京大楽友会館で人前結婚式をあげた。二人で結婚への決意を読み上げた。仲人は五郎の教授、四手井綱英夫妻であった。

五郎は当時マスター論文作成中。私は医学部口腔外科教室に大学院生として通っていた。

ある日、私が阪大時代にコーラスを通じて知っていたM氏がたまたま五郎の研究室に所属し、面白いヒマラヤ遠征の話聞きにいか

いかと誘いに来た。

ぼそぼそとなんのてらいもなく五郎はノシヤック登頂の話をした。その話はとても楽しかった。終了後M氏が彼の研究室に私を誘った。ついてゆくと四手井教授、堤助教授、五郎がいた。皆でラーメンを食べることになった。五郎は私に大盛りですか小盛りですかと聞いた。小盛りですと答えた。その帰り、大阪で降り、旭屋書店に立ち寄ったら“ノシヤック登頂”と

いう本が朝日新聞社から出版されて置いてあった。あつという間に読んでしまった。父にこのひとに惚れたという、親バカの父は私に黙って京大の口腔外科の美濃口教授に、娘がこんな人に惚れましたと言いに来た。先生は友人の教授を通じて五郎に探りを入れてくださった。ところが岩坪はこれから卒論を書かねばならないし、ヒマラヤ遠征の話もある。結婚どころではないという返事。その後2、3回市電の中で通学中に出会ったが、あいさつを交わす程度であった。そのうち、ぱったり出会わなくなった。Mさんが、五郎は交通事故でけがをして京大病院に入院していると知らせてくれた。1961年9月の話である。

ある病室からう～ん、う～んといううなり声。五郎は脊柱管に造影剤を入れ、損傷の有無を調べる検査中であった。そしてなんと、左の耳タブがポロリと落ちてなくなっていた。お腹がすいていますかと聞くと、はいと答えたので、病院の前の果物屋でバナナを一房買い、皮をむいて口もとに持ってゆくとパクパクと何本も食べた。

夫の市議員選挙の応援演説をし、婦人会会長、民生委員、お茶、お花の先生というシャキッとした五郎の母親を見て私は落第だと思った。

私が牛乳の空き瓶にひもでくくった花を挿していたら“まあ誰がこの花を”と聞いた。

五郎はあの女医さんやと言ったら、なんと母親は五郎さんあの人をお嫁さんにもらいなさいといったらしい。私の父が二人の結婚について占ってもらったら、来年の春までに結婚しないとこの話はずぶれるという事であった。デートは楽しかった。五郎の外股はひどいもので、並んで歩くと私は五郎の靴のうえに乗ってしまった。うどんを食べに入って、私がおつゆを残していたら、自分の空になったお椀を私の前に置き、私のおつゆを飲んでしまった。翌年、2月1日に四手井綱英教授ご夫妻の仲人で、楽友会館において、私達は人前結婚式をあげたが友人たちは“もしもある日、山で死んだら”という歌を歌った。

五郎の父が肺癌で左肺を全部摘出という大手術の後であった。当時はこんなひどい手術がなされていた。

私はウェディングドレス、五郎はモーニング姿で楽友会館から、うっすら雪の積もった道を

京大病院まで歩いて行き、五郎の両親に結婚の報告をした。

翌日、伊丹空港から新婚旅行。すべて私の父が計画。どこから何時に出発して、どこで降りるというメモをたよりに出発した。しかも、土倉さんの自家用車で伊丹空港へ。途中でエンストし、空港に着いた時にはアナウンサーが岩坪五郎様と叫んでいた。

旅行から帰って、五郎はマスター論文を提出。グラフは私も手伝った。グラフのplotが大きすぎると文句を言われながら…。女性ならもっと繊細かと思っていたらしい。5月に彼はサルトロカニリ遠征に出発。無事登山は成功し、羽田空港に迎えに行ったが叫んだのは林一彦先生の娘、はるみちゃんと私だけ。パパー、グローさん！！

父親の肺癌は進行し、五郎が遠征から帰るのを待っていたように死去。

1974年、K12遠征が計画された。五郎が隊長で、高木真一、伊藤勤、金山、奥、能田さんが隊員。それに精神科医の川合仁、歯科、口腔外科の岩坪吟子が随員。二人の医師は麓の村に滞在し、診療と調査を行った。

登頂には成功したものの、帰路、一人のアイゼンが靴ごと落ちた。その後、スリップしてアイス・ハーケンにぶら下がっているとの交信を最後に連絡が途絶えた。

私達は日本に帰り、高木、伊藤隊員のご家族に報告をしなければならなかった。このことは生涯忘れ得ない出来事であったが、私達の絆は強くなったと思う。

私は、今西錦司先生のアドヴァイスに従い、ヒマラヤの麓の村を西から東へと調査をした。つまり、パキスタン、ゴマ村（京大隊1974年）、ネパールのシミコット（チャンラ遠征隊1983年）、中国雲南省スノン村（京大隊1989年）に随員。麓の村で診療と調査を行った。そして、貴重な調査結果を得た。

我が家にはいつも人が集まった。第一赤十字病院でフル回転、帰宅後は登山関係の人々の食事の準備、片づけに明け暮れた。しかし、熱気を帯びた集いの準備、後始末は楽しいものであった。

今西錦司先生も、いっぺん五郎の家に行くと言って、皆に付いてこられたことがあった。

夜中まで飲んだり食べたり、遠征の話で我が

家はいつも活気にあふれていた。

大学紛争のさなか、時計台に登った10人が逮捕され、あんなところに上がるのは山岳部しかないと言われて、その対応にまた人が集まる。離婚するしないの相談にのったり、そのほとんどは私が出しゃばり、五郎は黙ってすわっているだけだったが。

我が家に来て、高熱を発した人がいて、私は日赤まで点滴を取りに行き、天井からつるしたり、うちの嫁さんが睡眠薬を1瓶飲んだ、どうしようと電話があったり、高血圧でフラフラの状態で我が家にたどり着いた人があり、土曜の夕方医師探しに走ったり。主人の様子がおかしいの、椅子から滑り落ちるの電話に“バカ、すぐ救急車を呼べ”と指示して私は日赤の門で待っていたり。

そんなことお忘れでしょうね。

五郎はいつも忙しかった。留守部隊ではあったが、梅里雪山の遭難は辛かった。姪の結婚式があり、午前中は白いネクタイ、午後は黒いネクタイに替え、さて弔辞の段になって、モーニングのポケットを探っても出てこない。辛うじて内ポケットから出てきた。

電車の中で、靴下をおめでた用から葬式用に替えるなど冷や汗の連続。

そんな月日を経て、五郎は90歳をこえた。

五郎とわたしは今年2月、軽いコロナにかかったが、すぐよくなったと思ったら数日後、五郎は夜にお風呂からあがれなくなり、翌日救急車で第一日赤に搬送、そのまま入院、私は一か月間毎日病院に会いに行った。その後、本町通りの久野病院に転院させられた。コロナ性肺炎と心不全であった。当初、一週間に一度しか面会が許されなかった。私は面会時間1時間前から待合室で待った。

初めのころ、少し話をしたが、そのうち何も言わなくなった。五郎は4、5歳の頃からおじいちゃんの馬場で乗馬をした。その場所に現在我が家が建っている。その“今熊野のおうちに帰りたい。なんでこうなったのかYさんに聞いて”とだけ言った。

面会時間を少しでも過ぎると、ナースが私を連れ出しに来る。とぼとぼと名札を返して帰路に。夜はいつ呼ばれてもよいように服を揃えて寝た。遂にその時が来て、5月23日21時15分、タクシーをとばしたがわずかに間に合わなかった。

本町通りを北に走り、公益社プライトホールに連れていかれた。車の中で私は横になったまま動かない五郎の身体にもたれて座っていた。

お世話になった皆様に深く感謝いたします。

2024年6月

追悼 岩坪五郎さん

渡辺興亜

岩坪五郎さんに初めてお会いしたのは1967年頃だったと思う。耳にガーゼを絆創膏で留めておられた姿が印象的で、岩坪さんのことを思い出すとその姿が浮んできます。当時、彼はカラコラムのチョゴリザ、ノシヤック登山に参加した強者であることは知っており、登山中の凍傷か何かの傷跡と勝手に思い、これが勇士の姿と思い込んでしまった。後に、実際は交通事故のためとかで少々がっかりしたことも思い出します。お会いしたのは多分、京都の三条付近の酒場かスナックで、樋口明生、中島暢太郎両先生（京大防災研究所）もご一緒でした。

その後も私はこの京都学士山岳会（AACK）の三人組としばしばお会いする機会がそれから1～2年続きました。この四人の集まりは

一応学問上の集まりで確か「国際水科学10年（IHD）」一環の研究班でした。研究課題は「ヒマラヤ氷河のインベントリーの作成」でした。実際の研究作業は中島研究室の女性と小生が担い、それなりの成果があったように思うが、四人でのナイトセッションでは研究的談義はさておき、専らヒマラヤ、カラコラムの登山や探検に関する談論は正に風発そのものの楽しい夕べでした。京都派三先生が交わす京都弁の会話からはAACK文化が垣間見られ、また彼らの率直な物言いはこれが京都風の世界かと驚いたものです。

その頃、岩坪さんや樋口明生先生とスキーを楽しむ機会もあり、札幌郊外の北大山岳部のヘルベチア小屋にご一緒したことや後立山でのゲ

レンデ・スキーも思い出されます。私のスキー術を過分に褒めて頂いたが（未知への挑戦シリーズ2, 68頁）それは実際とは相当離れた評価ですが、岩坪さんの思い出として、事実隠蔽のままにしておきます。

岩坪五郎さんとの付き合いはその後も続き、岩坪さんのゆったりとした人柄に惹かれ、お会いする機会が楽しみでした。小生とは専門分野が相当離れていたため研究者同士の付き合いは最初のヒマラヤの氷河に関するものだけでしたが、招かれて私の南極研究の話をする機会もあ

りました。

コロナ騒動が起きる前に京都の清水寺付近の酒場で岩坪ご夫妻とお会いする機会があり、岩坪さんは最近、「新しい今西錦司論」を考えているとその骨子を熱心に話されました。私はその話に感銘し、北大山の会で話して頂くという約束をしました。コロナ騒ぎでその機会が伸び伸びになってしまい、やっと実現できると楽しみにしたところへの訃報でした。ご冥福を祈るばかりです。

岩坪五郎さん

沖津文雄

岩坪五郎さん（ゴローさん）の訃報まことに悲しい。最近はお会いできる機会に恵まれませんでした。テニスなども楽しまれているというおうわさもお聞きしましたので、お元気で日々お過ごしのことと推察していました。残念です。

1954年山岳部に入部されたゴローさんは、わたしの一年先輩、都会暮らしに慣れない新人のわたしはいろいろな面で先輩に助けられました。当時の思い出を振り返りたいと思います。

当時は山岳ブームのような時代でした。1954年入部の同期生は30名を超えていました。彼等は黄金世代でした。一年下の1955年組はこの世代についてゆくのがやっとでした。入部初年は穂高の岩登り合宿でしたが、引き続き自由山行で、わたしはゴローさんについて、穂高から日本海まで歩く後立山ほぼ全山縦走に参加しました。山行最終日に初めて見る日本海の砂浜で寝転んだ一夜は忘れがたい記憶です。

翌年、1956年の春山合宿ではゴローさんと共に穂高に登りました。天気の良い合宿期

間でしたが、ザイテングラートから横尾のベースまでクラストした雪面をすいすいと滑走することはできず、涸沢の雪面一杯に斜滑降とキックターンを数限りなく繰り返し、滑り降りたのでした。1957年にはゴローさんと共に探検部のヒンズークシ探険隊に参加し、往復の船旅を加えて六ヶ月近くも行動を共にしたのも忘れることはありません。

その後1960年にゴローさんは、AACKの隊員としてアフガニスタン第二の高峰ノシャク(7490m)に初登頂されました。この時の登山隊の構成は非常にユニークでした。隊員のうち登山できるのはわずか3名のみであった(山岳No.105,2010,平井一正、斎藤清明)。京都を車で発ち、その車でアフガニスタン国内の登山基地まで、そこからこの高峰に少人数で見事登頂されました。ロマンに溢れた素晴らしいプロジェクトでした。

ゴローさんはやさしそうな外貌でしたが、内にはきびしさを秘められた京都人らしいお方でした。
(2024年11月30日)

ゴローさんのこと（大学紛争のころ）

甲斐邦男

私は1967.5山岳部入部です。5月までに多くの同回生はすでに入部していました。山岳部ルームに行った時は、五月山の準備や、春山の日高遭難の搜索準備で大変様子でした。だれが入部希望の私に対してくれたのか、わかりませんが、入部手続きをしました。

この夏で日高の搜索は終了しました。先輩達は、遭難の搜索を行うと共に、山岳部の登山の活動や新人のトレーニングは、例年通り進められて、私など新入部員は登山教育を受けました。今から想像すると大変な苦勞であったと思うとともに、当時の井上治郎（ジロー）などの先輩に感謝します。

この頃の山岳部は、通常の登山活動の他に、日高遭難の搜索とブータン・ミッションがありました〔ブータン・ミッション：第一次（1967）：小野寺ほか2名、第二次（1969.8～1970.2）：桑原ほか7名、第三次（1971）：谷ほか2名〕。この計画は、ネパールの登山禁止令の影響かもしれません。

1968年4月2回生になり、夏の合宿はオオタテガビンで行うということで、6月にオオタテガビン偵察、7月にオオタテガビン合宿でした。当時、オオタテガビンは未踏の沢登り、岩登りの地域でした。1968の秋頃から大学紛争が始まり、1969は大学紛争の時期で、1969.4は大量の留年生が生まれました。私は、身分上は学部三回生となりました。

1969大学紛争のころ、AACKのルームは、大学内を転々と移っていました。AACKの定期集会の木曜会はルームで開催されているはずでした。現役の学生にとって、AACKという組織があることは知っていましたが、よくわかりませんでした。AACKはどうなっているのという興味のもとで、山岳部の集会である水曜会の後に、AACKのルームに無断で何回も入っていました。ルームには木曜会の日誌が置いてありました。岩坪五郎（ゴロー）、松田隆雄（ランプ）の両名が毎週二人で木曜会を開いているようで、「中華そば屋の十番さんからラーメンの出前を取って、帰る。」という記事が続いて

いました。私にとって、この木曜会の状況は印象的でした。木曜会は当時休会状態みたいで、だれも集会しなかった。

AACKの海外登山計画はカンチェンジュンガ西峰（ヤルンカン）でした。カンチェンジュンガ西峰の登山許可申請（1964）を行い、8月正式許可（本隊；舟橋明賢隊長）を得ていましたが、ネパール政府の登山禁止令が出て、10月に許可取り消しがあり、計画は中断していました。1967年2月に、樋口明生（ジャン）、松田隆雄（ランプ）の偵察隊が派遣されましたが、ネパール政府の登山禁止令（1964～1968）の変更はありませんでした。1968年に登山禁止令解除があったが、カンチェンジュンガ地域は含まれていなかった。登山許可ができる見通しが全く無い状況で、また、大学紛争の頃であったので、木曜会は閉店していました。1969～1970年頃の木曜会の様子でした。

1971にカンチェンジュンガ地域の禁止令解除される（1972.2）という情報が入って、西堀栄三郎隊長、樋口明生登攀隊長で本隊を結成し、1973.2本隊派遣することに、1972に急遽決定になっていました。山岳部員でも木曜会会員でもない、我々（ジロー、グロン、カイ）は、1972年8月に東北の沢登りに行って、帰京したら、ヤルンカンの許可が出ていて、準備を再開するというを知りました。それ以降、ヤルンカンの実際の準備がはじまり、1973の遠征と帰国後の報告書作成まで続きました。

1974.2ヤルンカン報告書作成の目処がたった頃に、ゴローさんより、取立山スキー登山に誘われて、カイ、グロンはスキー登山をはじめました。これ以降、冬から春にかけて、毎週、毎月近郊のスキー登山を計画し、AACK会員に声を掛けて、実施していました。このスキー登山は長く継続して、1981に私が京都を離れてからも実施されていました。この計画の殆どはゴローさんの立案です。スキー登山のおかげで、ヤルンカン以降の木曜会に会員が来るようになって、継続していました（ニュース・レター No.101、2022、1970年代のスキー登山）。ゴロー

さんは行きたい山に行くために、計画・実行しただけだと思います。また、定年退官後は山登

りに専念したいと思っていたのですが、腰痛のため叶いませんでした、残念です。

悪い先輩ゴローさん

斎藤清明

岩坪五郎さんは、KUAC と農学部 の 10 年先輩です（あの農学部闘争時に逮捕された雄姿も覚えてますよ）。よく付き合わせていただき、なにかと声をかけてくれました（頼まれごとも多かったですが）。とくに今西錦司さん絡みのことが思い出されます。

1979 年秋、今西さんが文化勲章に内定したとき（桑原武夫さんも文化功労者）、「お祝い」を寄稿されました（毎日新聞 10 月 26 日夕刊）。「私は学問上ではなく、登山・探検での弟分か子分である。このことを私は自慢にしている」と、入部以来の自身や AACK の遠征歴などうまく綴られました。結びは「うしろをついて歩きながら考える。あと 30 年ほどで（二人の）年齢になるが、その時、私はどのように行動できるだろうか」「すばらしい自然人と文化人の先輩をもって幸せである」。

今西さん 83 歳のときの日本 1500 山（1985 年 11 月 3 日、奈良県・白鬚岳）では、その登路偵察のために今西さんを四駆に乗せて山麓まで行かれ、励まされました。そして当日は後輩の森本グロンを呼び寄せて今西さんの手を引かせ、登頂を手助けさせました。私も一緒させてもらったので、ゴローさんの手配に感心しました。

そうして、その 1500 山や 1300 山、1000 山、それに文化勲章など、今西さんの祝賀会の裏方をつとめられました。もっとも、1500 山祝賀会だけは会費制でなくて、今西さんからの招待制でしたが、受付で「ご祝儀は喜んでいただきます」と。

吟子さんとご夫妻で今西さんの山行によくお

供されましたが、私の家族もたびたび誘っていただき、楽しい思い出です。その身近で拝見した、今西さんへの気配りは健気なほどでした。そして、持ち上げるのも上手で、今西さんに半世紀ぶりにスキーを履かせたりもしました（1980 年 3 月、岐阜県・願教寺山）。” 幻のインナーリーン” を拝見するために。

私もゴローさんにおだてられ、AACK50 年史の『ヒマラヤへの道』（中央公論社 1988 年）を書くはめに。「本は今西編になるけど、印税はきちんと払う」といわれ、本文執筆分として相当額をいただきました。

K12 遠征隊の隊長としての責任、そしてご心労など、推し量ることしかできませんが、梅里雪山の留守本部ではよくつとめられたとおもいます。その遭難発生時、私はロシア（サハリン）で取材中で、毎日新聞に第一報が載ったことを帰国後知りました。あのとき、もし自分が留守本部に出入りしてたら、ゴローさんの手前、報じるべきか悩んだことでしょう。

吟子さんのことにもふれます。学生時代に保健診療所で診てもらったこともあります。日赤病院を辞めて伏見で開業されたとき、お祝いにいきました。すると、その場で診察台に座らされて、カルテ番号第 1 番の患者に。それ以来、インプラントをしてもらったり、お世話になりました。

なお、表題「悪い先輩」は、ゴローさんが桑原さんを「悪いおばあさん」（今西さんは「悪いおじいさん」でしょう）と誉められたのに倣ったものです。

岩坪五郎さん追悼

酒井敏明

日本山岳会の月刊誌『山』8月号に「岩坪五郎さんの逝去を悼む」の小文を発表しました。アクセスできる方にはぜひ読んでいただきたいと思います。

五郎さんとの付き合いは長かったが、気持ちが重く書きにくい文でした。

大事なことは説明したつもりです。現在、私自身コンディションが不良でして、新たに書き加えることはできないことをお許してください。

やはり高度 7492 m 未踏のアフガニスタン国最高峰ノシャックに当時登路偵察を目指す6人からなる踏査隊が接近し、突然出現したポーランド登山隊とのやりとりなどを経て、私と岩坪五郎の2人が初登頂したのは真実です。「ノシャック初登頂」1963年朝日新聞社刊にくだわしい。

このことが中心にならざるを得ないのです。

一別以来ほとんど連絡がなかった1960年のポーランド登山隊員の消息の一部がわかり、初登頂50周年にあたる2010年8月に同好のAACK関係者に声をかけ、旅行団(15人)をつくり、首都ワルシャワその他数か所を訪問しました。登攀隊長ビエルさんと登頂者クリンスキーさんに再会し、他にもポーランド人登山家たち10余人と会う機会があったのですが、雑誌『山』では字数制限のため充分記述できなかったのが残念です。

注：著者・酒井敏明さんは2024年12月3日逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

追懐の岩坪五郎さん

左右田健次

五郎さんが逝きました。酒井オシメさん、谷泰さん、松井敦男サルタンさんと私よりも一年若く、今は亡き高村デルファー、田附重夫ガイガー、岩倉哲男君と同期でした。日ごろの活躍ぶりを思うと、まだまだ早過ぎる他界でした。吟子夫人を愛し、山や森を愛し、AACKを愛し、友達を愛した男でした。物知りで、記憶力にすぐれ、他人を気遣い、見事な文章を書き、いつも深く勉強しながらも、それを人に知られるのを嫌い、照れ屋でした。その照れ屋であることも覺られないように努力していたとも思います。

昭和27年、9月末潮岬に上陸した台風が愛知県、三重県、長野県を中心にした東海地方を襲い、5千人を超す犠牲者を出しました。伊勢湾台風です。登山どころではない大きな災害でした。11月に入り、もう山も静かになったであろうと、五郎さんと共に中央アルプスを歩きました。折よく五郎さんの指導教授でAACK

の大先輩でもある四出井綱英アンギラス先生が伊那にある信州大学農学部集中講義のため滞在しておられたので挨拶かたがた立ち寄って大層な夕食を御馳走になり、翌朝木曾駒ヶ岳に向かいました。途中の山の木々の多くは無残にもなぎ倒され、台風のすさまじい爪痕が残されていました。登山路も崩れており、迂回を繰り返しました。五郎さんは倒木の数や種類を調べながら、素人の私にレクチャーをしてくれました。シラビソ、オオシラビソ、ミヤマハンノキの名前を今でも覚えています。途中、新築間もない信州大学の研究用の小屋に泊めて貰いました。頂上近くの「濃が池」は底まで凍り付いて、水藻が造花のように見えました。雪の木曾駒ヶ小屋に人はなく、凍り着いた宝剣の頂上から木曾の山や町が望めました。空木岳まで行く時間はなく麓の駒ヶ根に向かって降りました。飯田線に乗って帰る途中、豊橋で五郎さんと頬ばった「ヤマサ」の竹輪の味を今も覚えています。五郎さ

んと懐かしい小さな山行でした。

梅里雪山での遭難事故の折には、五郎さんは齋藤ワイさんなどと共に骨身を削るような苦勞を重ねてくれました。計画の立案、隊員の選考、中国登山協会との折衝、予備山行から始め第一次、第2次の登山そして事故への対処のいずれにおいても、常に身を日の当たらないところにおいて一方ならぬ尽力をしてくれました。そして、日中双方のご遺族への気配り、遭難記念碑の建立などにおいても五郎さんの足跡のないところはあります。友情に厚い男でした。時は過ぎ、いくつかの山の記憶が次第に薄れても、五郎さんは吟子さんともども私たち老友の身の上を案じ、伊勢海老や鯛や蕎麦を食べる会を開いてくれました。会はオシメさんの点てるお薄から始まり、ワインや清酒が供されました。皆さん、名うての下戸で大いに盛り上がり、ただ一人上戸の私は美味しい饅頭と渋茶をいただきました。3年ほど前、五郎さんと吟子さんの知

り合いで英国オックスフォード大学において哲学や音楽原論を専攻している若い中国人女性を先生にして唐の時代の詩を中国語で勉強する会が開かれました。オンラインでの会です。杜甫、李白、王維、李商隱などの美しい詩を難しい発音に閉口しながら読みました。中国語に堪能なワイさんと勉強好きな吟子先生の綺麗な発音を恨めしく思った日々でした。

私も92歳の馬齢を重ね、間もなく五郎さんの居る来世に赴くことでしょうか。五郎さんは極楽の蓮の台（うてな）に座って、伏見の酒か、ブルゴーニュのワインを飲んでいるでしょうか？あるいは平井のポコか、寺本ショウちゃんか、デルファーなどと地獄にあるという針か剣の山に登る相談でもしているのでしょうか？もう直ぐ来るその時、私は五郎さんと何を話そうか、何を語ろうか、と想います。難しい中国語で話しかけるのだけは勘弁して欲しいと念じます。

名参謀への感謝

谷 泰

今年の春も帰国した際、大学の西部構内の前を通り過ぎる機会がありました。そこは今や新たな建物が立ち並んで様変わり。それだけにかえてあの壊れかけた自動車や古タイヤが乱雑に放置された広場を横切って、繁く通った薄汚い山岳部の部室、そしてパイオニア的登山とはなにかと喧々諤々と議論していた時代の面々が思い出されました。そのなかでのちに海外遠征に加わった人をあげるだけでも、平井、齋藤、中島、脇坂、並河、北村をはじめ、左右田、酒井、高村、松浦、岩坪、荻野、沖津・・・と数え上げればきりがありません。ただこれらの面々のなかでも、あの時代からずっと京都にとどまり、京都大学に職をえて、多くの未踏峰の遠征に加わり、のちに知患者として立派に学士山岳会の名参謀としての役を果たしたのはゴローさん、あなただった。とこんなことを思った日から間もない5月後半、イタリアに戻った後のことです。ゴローさん、あなたの永遠の旅立ちの報を受けることになる。そのため通夜にも、本葬にも出席できず、あなたの山仲間としての別れの

言葉も、奥さんとともに受けた厚情への感謝の言葉もかけられず、いま改めて筆を執っているところです。

ちなみにゴローさん、あなたは1954年に京大農学部に入學するとともに、山岳部に入部しています。わたしはそれより二年さきに文学部入學したものの、翌53年二回生になってから入部したので、山岳部入部年ではわずか一年違い。ほとんど同期の桜でした。しかもこの学部時代のことです。＜世界の最高峰エベレストが征服されたあと、いまやパイオニア的アルピニズムは存在しない＞と言って、部の活動理念をめぐり部の先輩たちと対立した本多勝一が、いく人もの部員とともに部を割って探検部を創設するという出来事が起こる。ただわたしたちはそのまま山岳部に残り、チョゴリザを手始めとし、ネパール、ブータンそして中国の未踏の高峰へという戦後の学士山岳会の一連の活動の歴史の序章をかざる活動に参画したのでした。

ところがあの時代から60年を経たいま、海外登山を取り囲む状況は大きく様変わりして隔

世の感を禁じえません。パイオニア的登山はもはや存在しないと言われながらも、なお到達するに値する未踏の高峰を探した時代は今や遠い昔。いまやそういう対象を探し出そうとしても見つからない。平地大気圧の三分の一ほどの世界を、一步一步重い歩を進めてようやく到達し、シャッターを切った未知・未踏の頂きも、いまや高感度カメラを搭載し常時地球を周回する人工衛星から簡単に撮影でき、容易に茶の間に配信できる。悪天に見舞われて高所に閉じ込められても、いまや無線でヘリコプターを呼べばよいのでしょうか。エベレストも南極も今やパック旅行が組まれて、英雄的探険登山の疑似体験教室と化している。また探検部の面々が密林の奥地へとたどり着いた原住民のひとびとも、再訪してみれば、携帯電話を手にした母親が、東京に出稼ぎに出た息子と通話しているという変わり様なのです。いまや<身の危険を賭しても>とわたし達を駆り立てた未知・未踏の地はもはやなく、山岳部が活動目標が<未踏峰主義>から<山を楽しむ>へと変更されてもむべなるかなと思うほかありません。

ただこのようにパイオニア的探険登山に終焉をもたらした背景を指摘することは簡単でも、あの人間としての生存可能性条件の限界を超え、個人の身体的・精神的能力の限界を押し広げて、未知の土地を踏むという行動にわたしたちを駆り立てた衝動、あれはいったいどこから生まれたものか。いったいどのような歴史的条件のもとで社会的価値を獲得したのか。いまなおその衝動が生き残り、どこかに行く先を求めているとしたら、どこに行けばよいのだろう。こんな疑問が残ります。

もちろんそれを考えてみるのに、山岳部に残った人々であれ、部を割って出た探検部に向かった人々であれ、未踏の高峰という垂直方向か、未踏の奥地と言う水平方向かの差はあっても、所詮は同じ。これまで人類が到達しえた限りでの地表上のフロントをさらに未踏の世界へと広げ、それまでの未知であった土地 *terra incognita* を知の領域に取り込む。つまり近代の世界周航航海の成功とともに明白になった有限なる地表、そこでの物理的・生物的未知を現地へ赴いて悉皆記述するという自然誌 (= natural history かって文明開化期には博物学と訳された) 的知の拡大運動の線上にまず位置づ

ける。このことは学士山岳会の先輩たち、今西グループの多くが、たんに山登り屋であっただけでなく、生態学者、地理学者、地質学者と言った広義の自然誌学上の探求者であったことにも如実に見出せる。また山岳部を運動部諸団体のひとつに入れて理解する学生課の組み入れに対し、「山岳部は単なる運動部ではない、文化部だ」などと文句を言った背景でもありました。ただそう答えただけでは、なぜ運動部の一団体とみなされるようなことになったのかと問われる。そこで岩登りをするからと言っても、ではなぜ岩登りをするのかと言うことになって、十分な回答にならない。おそらくそこには、自然誌的知の獲得運動が 19 世紀後半になって直面するひとつの事態が関わっている。つまりそれは地表上での自然誌的知の一層の拡大のすえ、未踏・未知の地として残された領域が、人間の生存可能性限界の彼方、大気の希薄な高地、極寒の極地、そして焦熱の密林の奥地へと押し狭まる。こうして生命の危険をも顧みず身体的・精神的能力の限りを尽くすことなしには、そのフロントを広げることができない時代に突入したということなのだと思えます。もちろん人間である以上 (いや動物である以上、飛び立とうとする若鳥でさえ)、身体的・精神的能力の限りを尽くし、危険を冒してでも自己の可能性の範囲を拡大する衝動、そしてその達成がもたらす充足感、なにも 19 世紀にまで待たずとも、かってから常に存在した。しかし 19 世紀という時代は、こういう衝動を強く抱く個人に、自然誌的知の拡大線上での歴史的偉業と言う社会的価値を実現する場を用意したということになるのでしょうか。だからこそ未踏の高峰ですと言えば、募金先の会社社長も断りがたく、報道機関はその成功を一大ニュースとして報じたのです。こうして、学士山岳会の未踏峰主義は、カラコラムからネパールのさらに困難な高峰の登頂へ、次いで低くとも未踏の地ブータンから中国へと未踏峰を探ることになったのでした。

ところがこういうわたしたちが未踏峰を探して情熱を燃やしたこの 1960 年代という十年は、人工衛星をもって人が月面に到着する出来事をもって幕を下ろす。このことは学士山岳会にとって無関係な出来事ではなかった。かって歴史的偉業とされたパイオニア的探険登山の価値が相対化される時代に突入したのです。こ

うしてチョゴリザ時代では喜んで後援を惜しまなかった新聞テレビ会社はもちろん、募金に向かった会社の募金担当も、援助する名目に乏しいと顔をしかめはじめる。それとともにたんなる山登りではない学術ですなどと言うレッテルを貼る必要が増したのです。こういう時期京大に職をもつ会員がいろいろな点で役立つのは言うまでもありません。ただ京大に職員として残った同世代と言え、左右田、谷、高村、岩坪くらいしかいない。しかも谷、高村は60年代末には外に出る。そこで「はいわたしの専門は林学、山に関係があります」と胸を張って言えるのはゴローさんひとりでした。もちろん木は未踏の高峰のふもとは生えていても、その頂きには一本も生えてない。だからこんなことを言っても、なかば詭弁。ゴローさんが本気でそんなことを言ったかどうか、そのあたりは知りません。しかしゴローさんはこういう自分の立場を知ったうえででしょう。終焉の鐘を聞き、会社の募金担当のしかめっ面を思い出しつつ、愈々価値づけが困難になる時代の学士山岳会の活動を支える有能な参謀役を引き受けてくれたのです。中国の関係団体とも親交を深めて企画を促進する。また自分が先輩に育てられたことの恩返しのように、多くの若手の世話をかって出てくれたのです。

もちろんわたしも60年代末まで人文科研の助手で、その間サルトロ隊への参加の機会に恵まれて、あの壮大な岩と雪と空の世界を経験させてもらったもの。ゴローさんやデルファーさんとともに学士山岳会のその後の活動をサポートすべきでありました。しかし奈何せん、史学科西洋史学専攻者であったわたし、山と文献とはいかに詭弁を労そうとも繋げようがない。こうして自然誌の伝統もまたその一部に含めうるヨーロッパ近代の自然観の成立背景を明らかにするという課題をもって、サルトロカンリ隊成功の翌年、イタリアに向かう。ただその機会にじかに触れることになった家畜にかかわるユダヤ・キリスト教的シンボル、そして「人は神に似せて創られたがために動物を管理するに値する」という、それこそ超越論的人間中心主義ともいえる命題にぶつかる。こうしてヨーロッパ近代の形成とでもいえる研究課題からさらに遡って、西アジアにおいて最初に実現されたヒツジ・ヤギの家畜化の過程とその展開、そして

その文化的意味の解明とでもいえる、その後本格的に追求することになる課題を拾うことになったのです。こうして動物考古学的アプローチとは別個に、家畜化の過程を再現する重要な手掛りとして、牧民と家畜とのインターアクションについての知見を広域に収集するという、それこそ文化人類学的フィールドワークにも向かうことになったのです。もちろんこの作業は、それこそ京大の人文科研にいた梅棹さんが、京都で育てた若い民族学徒を引き連れて民博に出て、その後のあと継ぎとして、人文科研に戻ったときから本格的に開始されえました。おまけに梅棹さんがごっそり若手を連れて行ったため、京大の文化人類学関係の若手はゼロから育成しなければならない。また引継ぎの際には、梅棹さんからは、時間はかかるだろうが、長く京大には実現してない若手養成機関としての文化人類学の講座開設の実現を期待するとも言われる。こんな内輪話は、わざわざゴローさん、あなたに言うこともないのでこれまで言ってきましたでしたが、京大人文科研にもどった後のわたしは、学士山岳会の活動に関与し、海外遠征実現の手助けする余裕などなかなかみいだせない。いや梅里雪山での遭難時などゴローさんのそばで手助けでもできればよかったです。が、なにもできなかった。同僚としてすみませんとお詫びするほかありません。

いやお詫びしなくてはならないのは、それだけではない。イタリア留学の折に出会った現在の家内、彼女への思いを抱いてから、なかなか結婚を決心できずに、わたしは30代の後半まで独身でいました。もちろんそんなことはだれにも言えない秘めごと。そのため一向に結婚できない？わたしのため、奥さんと一緒に相談したのでしょうか。立派なお方を見合い相手として紹介してくれる。そこで、いや思う人がいるともいえず、そのお世話の申し出を受け入れ、少々交際するがどうも心が動かない。結局お断りすることになって、仲を取りもったゴローさんと奥さんお二人には苦しい思いをさせることになったことは、今も忘れておりません。

「ゴローはパンツひとつです」。えっ、そんな無茶な。ちゃんとゴローはテニスするときも、なかなかおしゃれなズボンをはいていたぞ。端から誰かの声が聞こえる気もしないわけではありません。でもわたしがあなたからもっとも確

かで、変わらぬ事実として教えられたことは、これでした。もうずっと前のことです。それ以来、知人の電話番号をおぼえるのに苦労し続けていたわたしは、よくかけるひとの電話番号を可能な限りゴロー方式で記憶することを始める。いやそれどころか、自分でパスワード番号を設定しなくてはならないこの頃になっても、おおいにゴロー方式に従って覚えやすい番号を案出して便利をさせてもらっています。ゴローさん、いまやあなたは、携帯で<ゴローはパンツひとつ>と入力しても届かない世界に逝って

しまった。でもわたしはこれらゴロー方式に従って案出した番号を使うたびに、「はい、五郎はパンツひとつです」と胸を張って答えていたあなたの姿が思い出され、思わず頬のほころぶのを禁じえません。その軽妙でかつ戯れたあなたの姿勢は、くそ真面目ものでは見えてこないことの裏面を、自分も含めて脇から見る姿勢と通じ、まさにゴローさんの真骨頂。真面目ものの多い山岳会の面々のなかで、だれにとっても代えがたい名参謀役をあなたは果してくれたと思っています。感謝。

岩坪五郎先生

中山茂樹

1980年に私が林学科に入学したときゴローさんは森林生態学研究室の講師でした。

4月に入学した一年生は学部の方には授業などの用事はなくもっぱら教養部に出入りするだけでしたが、そんな中で、ゴローさんの研究室の部屋に行った私の記憶に残る最初なのは、山岳部の先輩で甲斐さんがおられる風景です。甲斐さんはだまって窓際によりかかっておられて、ゴローさんから「この人は、この前のチョモランマ北東稜アタックのときのサポート隊長様だぞ」というような紹介を受けました。そんなスゴイ人がその辺に居られる京大山岳部にあたらめて感動したことをよく覚えています。

その後、しょっちゅうゴローさんの部屋へ出入りするようになりました。高田光政さんの仕入れられている登山靴などで展示品を安く譲っていただく仲介もしていただいていた。現役は「ゴロー商会」と称し多くの学生がお世話になりました。

もちろん林学の学業のなかでもお世話になりました。2年生の樹木実習をはじめ演習、講習でたくさんお世話になりました。授業では森林土壌論を受け持たれていました。その試験中におそらくは煙草を吸わなければならないので部屋を出られるとき「絶対にカンニングはあかんでえ」と言って外に出られ、中に入られる前に扉の外で二、三回咳ばらいをしてから入って来られるのでした。

そう、ゴローさんはいつも咳をしておられま

した。なぜゴローさんはいつも咳をしているのか？咳が出るのになぜ煙草を止めないのか？ということがときどき話題になりましたが、その答えは、若い時から高所に行き過ぎているので平地の空気が濃くて咳が出る、濃い空気を薄める意味で煙草を吸わなければならないのだ、というものでした。

ご自宅にも何度もお邪魔しました。生ガキをこじ開けるのや、お肉に小麦粉と玉子を付けてバターソテーするピカタを作ったりというのはゴローさんのおうちで初めて体験しました。白身魚のムニエルもゴローさんのおうちで初めて作ったように思います。

そのご自宅の庭を作り直すのに、林学科の造園学教室にコンペをするよう依頼され、学生の提案した作庭を取り入れられたこともありました。

1958年のチョゴリザから始まり、それはもうたくさんの海外登山にかかわって来られましたが、私が学生の間に行きましたマサコンの登山では、ゴローさんの部屋に私が訪ねて行き、隊長をどなたにお願いするのが良いか相談したところ、即座に「森井（堀）のデカさんが京都に帰ったはるやろ」といいながら齋藤ワイさんに電話を掛けられて、電話の向こうのワイさんも（おそらくは「ほう、そうかね」なんておっしゃったに違いなく）賛成されて、それで隊長が決まったようなものでした。そしてご本人の堀先生も隊長を喜んで引き受けていただいたわ

けです。

梅里雪山の最初から最後まで、これはもう一方ならぬお世話になりました。さまざまなことがありましたがゴローさんがおられなければ成り立たなかったでしょうし、遭難の後もゴローさんは遺族のみなさんのすぐそばに常にいてくださいました。この登山隊では私のほかに林学出身でゴローさんの研究室出身が二人いて、その二人が二次隊で亡くなったことでゴローさんも我が子を失ったような心境であったと思います。

梅里雪山のあと私は関東暮らしとなり（第三

次隊は東京から参加しました）、ゴローさんとのお付き合いも疎になりましたが常々梅里雪山のことでは気を配ってくださっていました。そして三十三回忌の法要の相談をしている途中からご本人もだんだんと元気がなくなり、法要には参列いただけませんでした。それからは関西出張の度にできるだけお顔を見におうちに寄せていただいておりますが、今年の5月20日に久野病院にお見舞いに行きましたのが最後となりました。

ゴローさん、長い間ありがとうございました。

(2024年12月23日)

岩坪五郎さんの思い出

芳賀孝郎

岩坪五郎さんのご逝去に心よりお悔やみ申し上げます。

私は五郎さんが入院をしたことを知り、毎日五郎さんの回復を祈っていたが残念にも祈りは届かなかった。しばらくの間悲しみでお悔やみの言葉もなかった。

五郎さんと私は1958年チョゴリサ登山以来60年余の長い間深い友情により結ばれていた事にただただ感謝のみである。

1958年のチョゴリサ登山は藤平、平井の両隊員により成功した。第1回の登頂は成功せず、第4キャンプに五郎さんと私を残して全員がベースキャンプに下り、1週間の休養後に再挑戦して登頂した。加藤副隊長の命令で、高山病になった五郎さんと私は、ゆっくりの歩きでようやくベースキャンプに戻り、桑原隊長からその苦勞のねぎらいを受けた。登頂の成功後、二人の高所での活躍が成功に結び付いたと励まされたことが思い出される。

その後五郎さんは酒井オシメさんと共に1960年のノシャック初登頂に成功した。1962年にはサルトロカンリ登山隊にも参加、登頂成

功に貢献して、ヒマラヤ登山の第一人者の一人になった。

しかし五郎さんはその後のK12登山隊長を務めた。この登山での遭難事故で、その責任を負う立場で多くの困難に遭遇したことを知った。更に梅里雪山の大遭難でも苦勞した。

私は五郎さんのお蔭で楽しいことが多々あった。毎年アンチョコ会を思い出す。特に日光の光徳小屋での集会では、後輩の贄田がフランス料理の献立を作り、京都からは料理に合わせて飲み物、デザートを用意してもらい、小屋での最高の宴会を開いたことは五郎さんのお蔭であった。

五郎さんとは北海道でのアンチョコ会、ポーランドでのノシャック登頂50周年記念祝賀会、日本山岳会晩餐会でのチョゴリサ登頂60周年記念での映画の上映、皇太子殿下との会談等思い出は限りなくある。これらの楽しい思い出は「人生の宝」と思っている。

五郎さんに感謝し心よりご冥福をお祈り申し上げます。

「岩坪五郎」先輩のご逝去に心を込めて哀悼の意を捧げます

藤本栄之助

私は「探検部」が創立された1956年に第1期生として入部しました。

創立時期の探検部には本多勝一、高谷好一、曾根原恵夫、荻野和彦、吉場健二、沖津文雄など、山岳部で鍛えたそうそうたる先輩がいましたが、岩坪五郎さんは「山岳部」にも席を置いた特殊な先輩でした。創立早々にもかかわらず「探検部」からは海外遠征としてヒンズークシュ山系の「シャーハンドック」登頂遠征隊を派遣し、その荷づくりには昼夜をかけて精を出したり、その合間に登山訓練に出かけたり忙しい毎日を勢力的に過ごしたのも懐かしい思い出です。そういう日々の中には議論が衝突して激しい論争になったりしましたが、そのときの仲裁役は決まって岩坪先輩の人間性がうまく収まりましたのを憶えております。

われわれ新入部生が先輩からこっぴどくやられても、いつも岩坪先輩は慰め役になって勇気づけてくれました。

それ以降に相続くAACKの海外遠征隊派遣で、リーダー役目の「桑原武夫」が常に「岩坪五郎」を渉外担当に指名したのも肯ける判断でした。

しかしながら登山家としての名声は、当時の並みいる大先輩の英雄的業績からすれば、岩坪先輩は決して目立つほどの存在ではありませんでした。私も「笹ヶ峰」のスキー合宿訓練に参加したり、比良山系の「蓬莱山」直下のコルでの「イグルー」設営訓練で一緒に経験から、名登山家と言えるほどの存在ではありませんでした。むしろ岩倉の「岩登り訓練基地」には、今でも「グローとかげ岩」という不名誉な名称のルートが残っているほどです。

私は熊本県田舎町の貧しい家庭に生まれ、7人兄弟の中で育ちましたから、これ以上両親に経済的負担をかけることを断念し、九州の田舎町の企業に就職し後ろ髪引かれる想いで都落ちして就職し、AACKとの距離感は天文学的なほどの遠くに隔たってしまいました。

昭和35年(1960年)のことです。

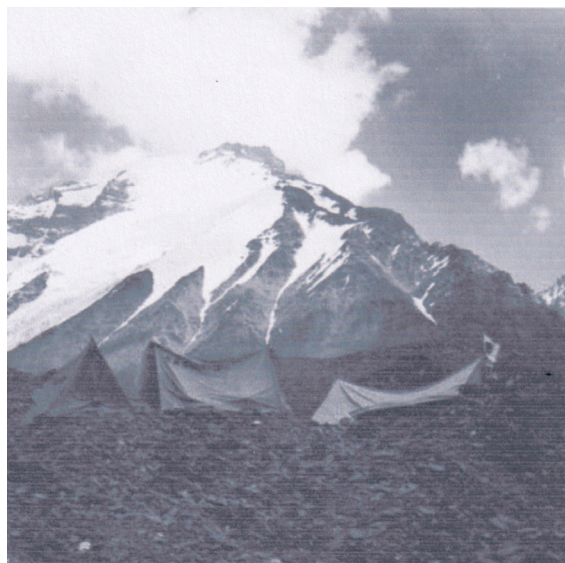
その年の春は、桜の花を見ては京都の「円山

公園のしだれサクラ」を思い出し、九州山系の沢の流れに「哲学の道」沿いの美しい溪流を重ねて思い描き、淋しい春を過ごしていました。

しかし、ある日の朝、私の心は一変しました。

その日の朝の「朝日新聞」の一面に京都大学AACKの「酒井敏明」と「岩坪五郎」がヒンズークシュ山脈の未踏峰「ノシャック」の初登頂に成功したニュースが輝いていたからです。この当時はヒマラヤやカラコルムの未踏峰への挑戦はPolar Methodが正攻法とされた時代だったのに、突然ポーランド隊のライバルが現れたこともその一因だったにせよ、酒井と岩坪は果敢にも一気に頂上アタックに挑み、見事に初登頂に成功したのは、ナンガパルバットに単独登頂に成功した「ヘルマン・ブール」の偉業にも匹敵するものであり、AACKの輝かしい歴史の中でも特筆されるべきものであります。

それでも当時では「酒井敏明」先輩の名前は「高谷好一」(ハッツアン)の名前と共に、毛勝猫又ルートからの厳冬期「剣岳」初登頂の英雄として鳴り響いていましたから、納得できましたが、あの「岩坪五郎」さんでも訓練精進すれば英雄になれるんだと思い直し、私はそれから毎週日曜になると近くの九州の山々に登り訓練



雄峰ノシャック (7492 m)



ノシヤック登頂者、左から岩坪五郎、
S. ビエール、酒井敏明



ザコパネ国立公園にて
ノシヤック登頂者ビエールさんと藤本

に励みました。あのころは九州の山にも降雪は深く、冬山の訓練にもなりました。雨の日曜日には傘をさして訓練に励みました。しかし九州の田舎でどんなに頑張ろうとも AACK の代表としてカラコルム・ヒンズークシ遠征隊に選ばれることなどあるはずがありません。

また大学と違って大企業の中では正義が通ることなどむしろ希少なケースであり、どろどろした権力闘争の中で誇り高く生きていくのは、極めて困難であっても、学生時代に先輩から学んだ Pioneer Spirit を補助線として引き、状況を見直せば単純に正しい解決への糸口が見つかり、“濁しても盗泉の水は飲まず” という信念を貫くことができたと今でも世間に恥じることもありません。

社会人になっても「探検部」の現役の連中と冬山訓練にも参加し、そのうちに「岩坪」先輩との交流も再開し、Ann-Chogo 会メンバー 30 名ほどのチームで私の隠岐の島でのバイオマス事業開発を見学に来ていただいたことにも感謝しております。

私はその後もヨーロッパ・アルプスの Montblanc、Breithorn、Alarinhorn、その他多くの無名峰にも登頂し、カムチャッカ半島最高峰のクリュチュエフスカヤ遠征隊にも参加しましたが、ポーランドの 2200m ほどの最高峰に登頂した際にガイドに雇ったタデウィッシュ君からノシヤックのことで AACK を尊敬しているという話題を持ち掛けられ、帰国後すぐに「岩坪」先輩と「酒井」先輩に連絡を取りノシヤックを共に登ったチームとの再会の計画が立てられ、ちょうど 50 周年記念となる 2010 年に Ann-Chogo 会の有志 25 名でポーランドを訪問し、あの当時のポーランド隊メンバーとの劇的な再会ができたのも AACK の歴史の中で誇るべき出来事です。

私も 88 才の超高齢者になりました。私の人生の半分ほどは「岩坪先輩」と過ごしたような感覚です。そのような重要な人と突然別れるということは、親兄弟と別れるのとは違った哀しみです。岩坪先輩のご冥福を心を込めてお祈り申し上げます。 合掌

「ゴローさん早く逝ってしまったなあ！！！」

松浦祥次郎・コッテ

ゴローさん逝去の訃報を 5 月に受けた時は瞬間的に「せめてもう一度は、ご夫妻共々にゆっくり食事を楽しみたいと願っていたのに」とがっくり気落ちし、暫く全身の力が抜けたようになった、と同時に、去年の秋に、京都の老

人ホームで養老介護状態にある次兄（修次・満 100 歳、僕とは 12 歳年長）の誕生祝いに行った機会に、東山剣宮町のご自宅へ突然に押しかけの訪問をさせて貰い、短時間ながら歓談できた事が何よりの思い出として心に刻まれること

になった。

その訪問の帰り際に頂いた「鰻の佃煮」がそれまで食べたどんな鰻料理の味より美味しい事に驚き、ゴローさんの味覚の凄さに感心した。「次回訪問時には何か東京で最上級の味だとの評価ある手土産を探しだして持参し、楽しんで貰おう」と考えていたのだが、もう果たすことが出来ない。せめて、御仏壇にお供えすることだろうか。

最近頻りに受ける親しい老友達の訃報以上にゴローさんの訃報に格段に深い寂寥を感じさせられたのは、ゴローさん逝去の少し前、今年の3月中旬に、上に述べた修次兄が突然に体調を急変させ、身罷ってしまった事がある。ゴローさんは男5人兄弟の末子だと聞かされた記憶がある。僕も同様に男5人兄弟の末子だ。三男は幼児死亡、次兄の1歳上の長男はほぼ平均寿命を全うした。山岳部の先輩でAACK会員だった山口克は親戚の他家を継いだ四男の実兄だった。男5人兄弟の末子が独り残された時の孤独感、老境では更に深いのだろうか。ゴローさんはどうであっただろう。僕の場合は、克兄との間が10歳も離れており、自分の幼・少年期の成長に年長3兄弟から適否何れにせよ強い影響を受けた自覚があるので特別かも知れないが。

こんなことを考えていると、本来バラバラの個人同士が、偶然にいろいろな因縁のもとに出会い、また離れながら、繋がりを保ち、個々の人生を歩みつつ、その様相の類似や差異、関係の構造とその変遷がどの様であったかを改めて知りたくもなってくる。もし出来る事なら、これを相まみえた双方の個人が生存中、認識能力の確かな間に、双方が面と向かい、人生の節々を確認し合いたいものだ。しかし、実際には例え夫婦の間でも、こんなことは出来ないのが普通だろう。そこで逝ってしまったゴローさんと僕の間で、対話の空想的真似事を追悼のご縁を得た機会に走馬灯風に試みてみたい。

ゴローさんと僕が知り合ったのは、京大山岳部に同期入部したのが1954年だったから、それから今まで70年経っている。この間の二人の生き方の中に、お互いが十分に理解しあったり、或いは知らない間に、関係の構造変遷の中で本質的な影響を及ぼし合ったりしたことを眺め直すのも、追悼として意義深いことと独り合

点している。

始めの話題は、お互いが相手を何時、どのような機会に「自分が何らかの意味で、ある個人を“対応すべき人物”と評価認識したか」だ。実は、ゴローさんの方が先に「松浦祥次郎とは何者か」との関心を持ってくれたのだった。僕自身は全く知らずに居た。ゴローさんが京大浪人中に京都府立朱雀高校補習課程に通い始めた年だったとか。僕はその時、同高校2年生。高校が夏休み明け以後定期的に実施した入試模擬試験で、数学の模試に毎回上位10番内に入る2年生が居る事に気付いたゴローさんが「松浦とは何者」と意識し「こいつに勝たなくては」と決意したとの事で、入部前に僕を認識したと、随分後でゴローさん自身から聞かされた。また、それ故に僕の性行の論理性、理知的能力に一定の信頼を置いて貰えたような気がする。一方、僕はゴローさんが何を目指し、真実何に人生をかけたのか長く全く理解不能なままであった。何となく気が合うことが多かったし、人間的信頼に何の懸念も感じないまま気持ちの良い山友達関係を続けていた。そして何時の間にか、心底から親友と呼べる数少ない人物の一人だ」と信じ、そのくせ意外に双方が淡々とした友人関係を最後まで続けてきた。

ゴローさんが自身の人生を回想し、平成20年10月に書き上げた「ゴローのヒマラヤ回想録」の中で、現代の森林学研究者としてかくあるべきと考えられる根幹的理念を「V 地球科学論議」の章中に示された。その中で特に「原子力発電の安全維持、開発・発展を」との節を設けられた。その中で僕の畢生の仕事に理解を示されると共に人間社会にとっての重大性を端的に示された。まさに真の親友に恵まれていたことに深甚の感謝を捧げたい。

僕は恥ずかしい事だが、長い間、ゴローさんが人生で、本当は何がしたいのか正確には掴み切れていなかった。しかし今に到って、多少は理解に近づいた気がする。

僕の人生も曲折は多少あったが、素直であった。原子力科学技術の分野で、ひとかけらでも良いから何かを成そうと決心を固めたのは中学生時代だったから、「彼か、此れか」の選択では迷うことは何も無かった。山登りが好きでも「山か、原子力か」となれば、実際にそうだった。僕型の人間の進路は一般に単純らしい。

生物の進化はそう言うものでは無いらしい。今西錦司先生が「生物は生物らしく進化する」と喝破されたが、ゴローさんの人生はまさにその通りだったと受け取れば、凡そは納得できそうだ。「ゴローさんは須く、ゴローさんらしい人生を送った」と理解できるような気がする。

しかし、このいずれもが成就するには、それを可能とするような外部・内部構造が不可欠だ。その構造を造って居たのが、京都大学とそれに深く体系的に拘わっていた人的構造だったと考える。具体的には今西錦司、四手井綱彦・綱英兄弟、西堀栄三郎、梅棹忠夫等々のAACKの先生方だったと見える。

しかも、ここで興味深いのは、この先生方とゴローさんの関係は、この先生方と僕自身の関係に非常に近似的な事だ。僕は今西・梅棹先生の物の見方・考え方を仕事の上でかなり参考にしたし、綱彦先生は大学での恩師、西堀先生は

原研入所時代の直接の上司であり、その後も長期に涉ってご指導を受けた。

ゴローさんと初めて出会ったのは、新人歓迎山行であったような記憶がある。その時のゴローさんのスタイルは学生服に角帽でとても山登りが出来そうにない風貌だった。正直のところ「この男、本当に山登り出来るのかいな？」との気がした。その後も、猛者と感じられるような山行を山岳部現役時代にした記憶が無い。しかし、ゴローさんはどんどん化けていった。そして、何時の間にか、今西錦司さんの最高執事のような、ヒマラヤ登山家になっていた。ゴローさんの変化を思い出すだけで、人生の深みを感じることが出来そうだ。ゴローさんが日本山岳会の会長に推戴されることが無かったのが大変残念な事だった。

散華、散華、六根清浄。合掌

岩坪五郎さんを悼む

山本良三

静岡大学の酒戸弥二郎教授（愛称ヤジさん）の勧めで、京都市今熊野剣宮町の五郎さん宅を初めて訪れたのは、1962年、五郎さんは助手で、その時片耳はなかった。メガネは絆創膏で止められていた。ノシヤック初登頂から帰国して、ほどなくしてから、市内でタクシーの交通事故に遭ったのだとお聞きした。かなりの大事故だったようで、“運が悪ければ、死んでいたかもしれない”とは奥方吟子さんの言。

私と山岳部の相棒山下 潔君（後日、テラムカンリ初登頂遠征隊マネージャー）と二人は泊まりがけでお邪魔し、ヒマラヤ遠征に関する勘所を教えてもらいに伺った。その夜、吟子さんに美味しいステーキを焼いていただいたのは忘れることができない思い出になっている。五郎さんのメモはその後の遠征に大いに役立った。AACKのヒマラヤニストとの交流は以前からも続き、加藤泰安、齋藤惇生、中島道郎、平井一正、酒井敏明、芳賀孝郎氏等とは既に面識があった。

1971年、今西錦司氏が日本山岳会長に就任された時、私は理事として4年間仕えた。以後、

西堀栄三郎、今西寿雄、藤平正夫、本多勝一各氏等の知遇を得た。

1976年酒戸弥二郎氏の逝去により、私はヤジさんの身代わりとして、数人の会員の勧めで、AACKに入会した。以来48年の歳月が流れた。今西錦司氏の1500山記念登山最後の奈良の白鬚山には、今西御大から直接声がかかったが、海外にいて参加できなかったことが、“お前は、わしの孫弟子や”と言われた身としては、一度は記念登山にお供しなければと思っていただけに、果たせず心残りである。

五郎さんを悼む時、『ゴローのヒマラヤ回想録』に触れない訳にはいかない。

私は、五郎さんから“あまり売れてはいない”とお聞きしたので、日本登山医学研究会の席で皆さん方にご案内したところ、立ち所に60冊ほどの注文があつて、びっくりした記憶がある。都合100冊を売り捌いた。この本は「落語的人物論」の項で、AACKの今西錦司、桑原武夫、四手井綱彦、梅棹忠夫、林 一彦、脇坂 誠、田附重夫等を取り上げている。AACKの重厚な人脈の中で、五郎さんの人生に大きな影響を

及ぼした人たちである。この人物論は、内側から見た AACK の群像であり、五郎さんの人生を決定づけた人々との交友の歴史である。五郎さんがいかに豊穡な人脈に囲まれていたのかが手にとるように分かる。中でも、今西御大の人物スケッチは一読に値する。間近で長年親しく接していなければ決して描けないもので、御大の心を存分に読んでいる。《かつて、今西さんは、私たち夫婦に、リーダーの条件について話したことがある。それは、人気と使命感と洞察力に要約できると自分は考えるというものであった。それぞれの説明にサルでもという注釈がついた。人気のない奴はリーダーにはなれへん。サルでもそうや。というふう》。私は、これこそが今西リーダー論の真髄であると見る。特に、人気のあるなしはリーダーとしての最大の条件だと思う。

人を惹きつける人間力はどこから来るのだろう。使命感は理解しやすい。では洞察力の根底には何があるのか。五郎さんは、次の様に結論付けている。《運動神経も良く、天性というか動物本能的に優れていると感心した例も多くあるが、やはりよく勉強した、研究した、そして多くの経験からの結果だというべきだろう》。今西さんの 1500 山登山に最も多く同行されたとされる五郎さん夫妻を頼りに、今西さんは登山を楽しみながら晩年を過ごされたことだろう。五郎さん夫妻に心から感謝しておられたに違いあるまい。

五郎さんには、痛恨の歴史がある。それは、1974 年、京大山岳部を率いて遠征隊長として参加したカラコルムの K12 峰での遭難事故である。著書『K12 峰遠征記』に詳しいが、この時、五郎さんは前途有為な二人の学生を失った。五郎さんはこの苦悩を生涯背負う人生を歩んできた。皆が寝静まった深夜、ふと目が覚めて二人の顔が思い浮かび、朝まで眠れないこともあったという。五郎さんは京大を定年退職してから、5 年間近畿大学の特任教授となり、2002 年にその任も終わろうとしていた矢先に、立山の K12 峰での「遭難事故」が、「事件」になった。2000 年に起きた、二人の学生が雪庇の崩落で死亡した事故に対し、文部省登山研修所の講師であった登山ガイド二人（主任講師：山本一夫氏：JAC 京都支部、と高村真司氏：行方不明者所属班担当講師）が、業務上過失致死罪

で書類送検されそうになったのである。五郎さんは、《これは私がなんとかしなければならぬと直感した》と記している。《もし今西錦司さん、西堀栄三郎さん、今西寿雄さんらが存命なら、きっとやるだろう》。この時、五郎さんの脳裏に K12 峰で失った二人のことがよぎったであろうし、自分には「大学闘争事件」での逮捕、裁判の経験もある、AACK の同僚である荻野和彦さんと組んで、二人のガイドの救出作戦を展開した。それは「二人の若者を失ったことは誠に残念なことであるが、講師個人の刑事責任は問うべきでない。一方、国（文部省）には研修の企画者としての責任がある」との考えによるものである。

この救出作戦に成功しないと、今後登山研修所の冬山研修の講師を引き受ける人がいなくなり、一般登山パーティーでも、リーダーは常に謂れない過失責任を問われることになる。つまり、日本の登山の健全な発展を阻害することになるだろう。

さきに、一流の雪氷学者、測量学者、登山家などによって構成された「北アルプス大日岳遭難事故調査委員会」が、“今回の事故は異常な気象条件と豪雪の重なった巨大な雪庇の崩落と雪崩れによるもので、その予見はベテランの登山家をもってしても不可能であった”という趣旨の結論をまとめて報告していた。しかし、それでもその後二人は、実際に書類送検された。

取調べの結果、二人は「嫌疑不十分」で「不起訴処分」となった。それは、的確な弁護活動やそれを支えた署名などの広い支援があつての「救出成功」だったといえるだろう。この顛末は、『北アルプス 大日岳の事故と事件』（齋藤惇生編）として一冊にまとめられた。山登りする人の必読の書と言える。

五郎さんを語るとき、歯科医である奥方の吟子さんを外すわけには行かない。

『ゴローのヒマラヤ回想録』に、吟子さんの筆になる名文章が収録されている。

「今西錦司先生を偲ぶ会のスピーチ」、「黄昏一追悼 林一彦」、「追悼 田附重夫」である。いずれも故人を偲んで書かれた口語体の見事な文章で、読者を惹きつける。京都第一赤十字病院歯科部長を退職された吟子さんは、後日歯科医院を開業されたと聞いていたが、お目にかかる機会もなく月日は過ぎた。2003 年秋、国民

森林会議の議長に就任された京大名誉教授の半田良一先生と同席したので尋ねたところ、“私は吟子さんの患者です、京大の多くの先生方もそうですよ”との返事に嬉しかった記憶がある。

また、吟子さんは、現日本登山医学会（元日本登山医学研究会）でも、ヒマラヤ遠征隊の現地調査結果を論文にまとめて発表され、いずれも好評であった。

2013年10月、静岡大学山岳部紫岳会創部80周年記念会が東京で開催され、主賓のお一人であった五郎さんに“思い出のヤジさん”と題して講演をしていただいた。世代交代が進み、酒戸先生を知る人も少なくなったが、皆耳をそば立てて聞き入っていた。これが、酒戸先生について語られる最後の機会だった。

“明治は遠くになりけり”との印象が残った。

2018年4月27日、午後5時～7時半に東京日仏会館で開催された、“山本良三さんの出版を祝う会”の世話人代表を五郎さんがお引き受けくださり、海外登山の経験者を中心に45名の日本山岳会員に出席いただき、正餐会様のフランス料理を楽しんだ。この会は会員の松澤節夫さんにアレンジをお願いした。拙著『南アル

プスからヒマラヤへ —パイオニア精神への眼差し—』(山と溪谷社)の出版を祝う会であった。五郎さんの身に余る祝辞に感動し、我が人生最大の晴れ舞台であったが、内心は恐縮していた。

その後、札幌の芳賀孝郎さんと電話で話す機会が増えて、いつも五郎さんの健康状態について、情報交換をしていたが、或年五郎さんから賀状が来なかったのも、心配になり芳賀さんに尋ねると腰を痛めているらしいとのこと、命には別条はないらしいという返事。だが、吟子さんからの報告では、心臓も痛んでいたらしい。逝去の知らせがあつて、一呼吸置いてから、吟子さんへ電話を入れたところ、“今葬儀を終えて帰ったばかりです。1962年の事故の時、運が悪ければ亡くなっていてもおかしくなかったので、よく生きたと思います”と涙声でおっしゃった言葉が、胸に刺さった。

今西錦司さんの訶咳に触れて京大に居残り、また豊穰たる同僚や仲間にも困まれて京都大学山岳会、京都大学山岳部、京都大学に捧げた人生を歩んだ一代の英傑、岩坪五郎さんの堂々たる人生の幕引きで、五郎さんは最後の最後に何を思ったのか、いずれ吟子さんにお聞きしたいと思っている。合掌。

ゴローさん追悼

横山宏太郎

岩坪五郎（ゴロー）さんが亡くなられた。お世話になった先輩方が彼方へ旅立たれるのはさびしい。

「ヒマラヤ初登頂」を目指して入部した京大山岳部。初めてのヒマラヤとの接点は、「ヤルンカンの偵察から帰ってきたジャンさんとランプさんを迎えに京都駅へ行こう」という上級生の誘いだった。その後、通称「谷小屋」でのヒマラヤ研究会に顔を出すようになると、「ゴローさん」の名前はイヤでも耳に入ってきた。

意外にもヒマラヤよりも南極の機会がさきにやってきて、1972年に南極の準備にかかったところでヤルンカンの許可が来た。南極観測第14次隊で越冬中の1973年、ヤルンカンの遭難を知った。続いて槍平の遭難の報も迎えの船（観測船ふじ）で届いた。私は昭和基地でさんざん

酒を飲むしかできなかったが、ゴローさんが槍平へ現地調査に入られたことはあとで知った。

1974年、帰国するとK12計画が動いていた。隊長はゴローさん。会合が頻繁にあり、ゴローさんとの距離が少し縮まったのかもしれない。しかしK12は残念な結果になった。

しばらくして井上治郎さんをかしらにカイ・グロン・コータロー（甲斐・森本・横山）でネパール中部、ランタンリ計画を作った。ここから本格的にお世話になったのだろう。なにしろ50年も前のことだから細かいことは覚えていないが、「今西錦司さんに説明してOKをもらってこい」との指示はゴローさんに違いない。

隊長の依頼やら現地対応のノウハウやいろいろ教えられた。ゴローさん宅へお邪魔して飲んだり食べたりはしょっちゅうだった。初めて



1970年代後半、笹ヶ峰にて、京大山岳部員らと。
手前、右から2人目が岩坪五郎さん

みるような高級ウイスキーもあった。材料はいろいろあったので料理もした。遅くなったらそのままシュラフを借りて寝た。

今西山行（今西錦司さんと登る計画）にも何度か連れて行っていただいた。同期の甲斐邦男君と参加した南アルプスでは、甲斐が氷を担ぎ上げ、私がつまみを作ったもので、今西さんは大満足だったらしいが、それが悪い先例になったと言われた。魚を買いに糸魚川まで走ったり、けっこう無茶なこともあった。たいていはゴローさんの発案・扇動ではなかったか。でもおかげでいろいろな方の知己を得たり、ありがたいこともたくさんあった。

たのしかったのはスキー山行だ。これはニュースレターの101号に記事があるので詳しいことはそれに譲るとして、ほとんどの首謀者はゴローさんだったろう。その後半あたりになると、当時の山スキーとしてはけっこう高いレベルに達していたのではないか、と思うがどうだろうか。大日岳の雪庇調査は、ゴローさんと荻野和彦さんの主導ですすんだ。「雪氷学者兼測量技師」という肩書でお手伝いした。

私が勤め先で具合の悪いことになったときは、人脈を駆使してあちこち手を回し、クビにならないようにするための方策をいろいろ考えてくださった。渡辺兵力さん（東大スキー山岳部）に協力を頼んだところ「横山は自分が隊長を務めたチョモランマ登山隊の隊員だから」と協力を惜しまれなかったと聞いた。もちろんAACKでも多くの先輩方が協力してくださった（らしい）。ほとんど私の知らないところでこのことで、詳しいことはわからない。ともかくおかげさまで、最後の職場では、無事とは言え



1979年、飯豊山スキー山行。
右手前が岩坪五郎さん、左へ順に井上治郎、岩坪吟子、山口克、横山宏太郎、甲斐邦男

ないまでも、クビにならずに定年を迎えることができた。

多くの方が言われるように、ゴローさんはいろんな場面で、マネージャー役として力を発揮された。私はそのマネジメントにのって動いたひとり、といえるだろう。梅里雪山の計画を進める際にも、中国側との折衝など、ゴローさんの果たされた役割は大きかった。しかし私が登攀隊長を務めた第一次登山隊は力及ばず途中撤退し、再起を図った第二次登山隊の遭難（1991年）に至る。

そこでもゴローさんのマネジメントのおかげで私を含め救援隊は短時間で雲南に向かって出発できたが、残念ながら悪天候のため遭難現場には近づけずに救援活動は打ち切りとなった。そのあとにはゴローさん自身で捜索隊を率いて現地に入られた。これまた天候が悪く現場には近づけずに終わった。

ゴローさんは、K12でもそうだったように、ご家族へのフォローに力を尽くされた。2022年に33回忌法要を比叡山で執り行うため、諸々の手配をすすめられたのだが、その日が近づいてから体調思わしくないとのことで、私が引き継いで皆さんの協力のもと、法要を無事終えた。夕方、その報告にお宅へ伺った。ゴローさんもほっとされたのだろう。様子をお伝えし、お酒をいただいて、失礼した。ご恩返しの一つになったかと少し安心したが、これがなんとお目にかかる最後の機会となった。その後はお見舞いにも行けずに申し訳ないことだった。

これまでの数々のご恩に感謝しつつ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

事務局だより

残念ながら本号も、前回の堀了平さんの追悼号につづいて、岩坪五郎さんの追悼号になりました。事務局の私も1回生の時の1976年のスキー合宿以来、ゴローさんには大変お世話になってきました。直近の思い出は、2022年の晩秋、梅里雪山33回忌の法要のお礼に、岩坪五郎さん、吟子さんご夫婦、齋藤惇生さん、幸島司郎会長ともども、紅葉の坂本の里を訪れたことです（News Letter 104号、事務局便り）。ゴローさんは、法要を執り行っていただいた清原恵光大僧正や山田能裕大僧正と、昔話に花を咲かせておられました。山田大僧正の計らいで、本来なら1時間以上並ばないと中に入れない本家鶴菰そばに特別パスで入店でき、天ざるそばをいただくことができました。五郎さんは、いたく感動され、その後何度も坂本のそばをもう一度食べたいと言っておられましたが、今では叶いません。その後、年が明けて、お礼にガイガーカレーを食わせてやるということで、家にお邪魔しました。ゴローさんは、一度焦がしてしもうてやり直したと、徹夜で作ってくれていて、それは今までに味わったことのない美味しいカレーでした。醤油を入れるのがミソやと言っておられました。もう二度と味わうことは叶いません。ご冥福をお祈りいたします。

今年の総会は例年と異なり、以下の要領で開催します。皆さま、お間違えのないよう奮ってご参加ください。

日時：5月31日（土）13時より

場所：キャンパスプラザ京都（JR京都駅近く）

<https://www.consortium.or.jp/about-cp-kyoto/access>

会員動向

訃報

齋藤惇生 2025年3月11日逝去

編集後記

111号は岩坪五郎さん追悼特集号となりました。ご寄稿の皆様、ありがとうございました。

3月になり桜の開花予想が報道されるようになって時として寒気も入ったり、気温の上下が大きいようです。

この冬、各地の大雪と被害が報じられています。当地・高田では2月初めまでは積雪は多くとも20cm程度で山には十分な雪、理想的と喜んでいました。しかも1月中ごろの長期予報では、もう寒波はないとのことでした。

ところが2月に入ると強い寒気が居座り、1週間雪が降り続き、積雪深は109cmになりました。いったん減ってからもう一度1週間程度の寒波が来て、積雪深は138cmに達しました。

一日に新たに積もる雪は20～30cmくらいでも、それが一週間も続くと対応はたいへんで、影響が大きくなります。

報道される各地の大雪やその被害の様子を見ていると、雪の降り方・積もり方が従来とは変化しているような気がします。「気がする」だけでなく、データにあたって確かめてみたいものですがどうなりますか。

Newsletterは年度に4回の発行を予定しています。しかし2024年度は3回だけになってしまい、申し訳ありませんでした。

次の112号から発行時期を正常化して行きたいと思います。112号は原稿締め切りを4月15日とする予定ですので、ご寄稿よろしくお願いたします。

原稿送り先：横山宏太郎

発行日	2025年3月31日
発行者	京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所	〒606-8501 京都市左京区吉田本町（総合研究2号館4階） 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究 研究科 竹田晋也 気付
編集人	横山宏太郎
製作	京都市北区小山西花池町1-8 （株）土倉事務所